夜想
茶会記
#04 extra

# 春秋山荘 未定会の記

8月16日は五山の送り火で、京都ではこの日を境に夏が終わる。
記録的豪雨の送り火の翌日、山荘に20人ほどが参集した。
大半はイシス編集学校の学衆・師範代・師範連中。松岡正剛“校長”を迎えて、
いつもの春秋山荘とは少しちがう、編集学校っぽい場が生まれた。

/// 2016.12.01号

**【次第】**

一、本函編集～自己紹介
　　呈茶
　　菓子：馬場英豪「疏水」
　　抹茶：山本甚次郎「あさひ」
　　茶碗：相場るい児「蒼月白蛇」「攫燦想隆」
　　「金龍夢窓」「月華掌覆」「猩々乱禿」

二、幸田露伴『対髑髏』輪読
　　（演奏：フジイフランソワ）
　　松岡正剛 露伴語り

三、夕餉（祇園「川上」）

**【ゲスト】**

松岡正剛
フジイフランソワ
和泉加奈子

# 春秋山荘で露伴「対髑髏」を読む

会場には、「夜想・髑髏展」の名残りのフジイフランソワ「世見帰る」と山本直彰「The Long Goodbye」が展示されていて、その絵の前で、まずフジイフランソワさんの龍笛の演奏があり、赤羽卓美、大音美弥子、岩橋賢を中心に参加者の幸田露伴「対髑髏」の輪読が行われた。そして最後にまた演奏があり、輪読が終わった。すると聞いていた松岡正剛がすっと立ち上がり、「露伴語り」を振る舞われた。至極のひとときで、ここだけの話ということで、詳細は書けないので、サマリーを載せる。

## 日本近現代文学、雅俗の系譜。　髄たる露伴を「読む」ということ。

松岡正剛

淡島寒月に薦められて西鶴を知り、露伴は一気に「雅俗」の文学に向かった。近代化・洋化が急進した明治時代中期、すでに西鶴も世阿弥も古事記も失われて久しかったなかから、露伴、一葉、紅葉、鏡花と続く一筋の流れが生まれた。

露伴が携えたテーマは三つ。数寄・職人・化身だ。なかで化身は「対髑髏」もこれの話であって、そこには明治文学で重要になる風聞・伝聞の構造が絡んでくる。人から伝え聞いたという体をとることによって、伝聞者である作家・露伴は自身の生きる明治の時空に在るままにして、遥か遠くの物語世界に踏み入っていくことができるという仕掛けだ。

「伝え聞いて文字に起こす」とき、明治時代のやり方は、口語（俗）と伝承（雅）に分かれ、それを分けない雅俗の混淆が生まれていく。この雅俗こそが明治文学の白眉と言っていい。

露伴はまた、西鶴と出会ったことで和漢の融合にも向かった。「対髑髏」の最後にはこの一篇が何の本歌取りであったかの種明かしがされているが、さすが100の本歌取りを目指した西鶴、そしてその西鶴に夢中になった露伴。古今の中国古典から一休禅師の「骸骨草紙」まで、実にエンサイクロペディックに和漢の髑髏話を敷いていることが明かされている。

露伴の世界は、数寄も化身も雅俗折衷体も西鶴の復活も含めて非常に重要だ。この流れにこそ、三島由紀夫も井上ひさしも成立している。こうした筋のちがいをいわば無視して、本来別物である鴎外や藤村などともひとまとめにしてしまって日本の近現代文芸（文学）はわかりにくくなってしまっているけれど、その骨の骨の骨の部分を作り上げたのが露伴だったのだ。それを音読、朗読するのはとてもいい。五七の調子に慣れ、調子を整えて、次々と共鳴する言葉の連なりを感じていくといい。　■TEXT: 菊池しのぶ・福田容子

フジイフランソワ「世見帰る」部分

## /// BOOKS

### 近代怪談文学の嚆矢

『対髑髏』は、幸田露伴（1867/慶応3〜1947/昭和22年）の短編小説。山中の孤家で独居する妖艶な美女との邂逅に始まり、終盤で猟奇怪異の極みに急転する露伴22歳の作。明治23（1890）年『日本之文華』に発表され（初出タイトルは「縁外縁」）、前年（明治22/1889年）の「露団々」「風流仏」と並んで露伴の名声を高めた。ちくま文庫『幸田露伴集 怪談』編者の東雅夫はこの短編こそ「近代最初の怪談文芸作品の名に値する」と文学的価値を高く評価している。

**東雅夫：編**
**『幸田露伴集 怪談——文豪怪談傑作選』**
ちくま文庫／2010

元『幻想文学』編集長で、現在は怪談専門誌『幽』編集長の東雅夫の編による全15巻のちくま文庫「文豪怪談傑作選」の最終巻。現在文庫で「対髑髏」を読める唯一の本であることに加え、神仙思想に通じた露伴のバックボーンが窺える随筆考証が多数併録されている点も貴重。

## /// EDITOR'S NOTES

「対髑髏」を輪読に選んだのは、「夜想・髑髏展」を春秋山荘で催したからで、「髑髏」をテーマにしたのは、痩細っていく幻想の土壌を憂いているからだ。雑誌「夜想」は幻想文学、幻想芸術を通底音として編集してきた。リニューアルをしてサブカルになったと言われているが、本音は、通底音の世界にまた皆を引きずり込みたいからのサブカル顔だったのだが、どうも顔のままに受け取られたようだ。

ゴスというサブカル領域で象徴的な髑髏、スカルを使って幻想の表現を喚起できないか。生と死の対極、その極みとしての髑髏ではなく、何となく生に足を（あったらの話だが）残している髑髏をぽんと置けないか、そんなことを考えて展覧会を組んでみたが、作品は素晴らしく素敵だが、自分自身が髑髏をこなしきれていない感がまだつきまとう。

松岡正剛「露伴語り」の「つかみ」が、もやもやしていたテーマへのアプローチを改変してくれそうだ。一つは露伴を起点に、松岡正剛の言う「化身」を鏡花へと辿っていくという流れだ。幻想を日本文学の本流の側に置き直せるかもしれない。

東雅夫は、怪談の原点は幸田露伴にあるという。『幸田露伴集 怪談――文豪怪談傑作選』（東雅夫編/ちくま文庫）も露伴なくしては成立しないと。もう一つは「輪読」から派生した読み方を展開して、本の読み方を開発できるかもしれないという予感だ。

「輪読」は様々なものを産みだす。春秋山荘は、2年半無人のままで置かれた後に運用をしばし託された。久々空気を入れた日には、物の怪の気配に充ちていた。まさに「対髑髏」の庵のようだった。囲炉裏の前で、最初の展示「夜想・髑髏展」の準備に合わせた会合が開かれたが、赤羽卓美の提案で「対髑髏」を運営のメンバーとともに輪読した。まさに口開け、髑髏で開ける春秋山荘。そこから「対髑髏」の連鎖が始まった。

夜想「カフカのよみ方」以来、作家たちのカフカ作品へのアプローチが続いていて、それぞれの作家のいわば手が読むカフカがそのまま展示になっている。（春秋山荘でもカフカ展が行われている）。朗読という読書もある。井上弘久がカフカやブコウスキーや乱歩を朗読しているが、朗読と演劇とパフォーマンスが読書として融合しているやり方を編み出した。輪読もまた読書を圧倒的に革新する。いろいろに切り込める、様々に摑める小説を、読みながら同時に共有していく体験は、まさに他人の声で読書に何かを発見する旅である。

小説という作品へアプローチするのは読書だけではないということだ。もっと自在に自由にそれでいて核心にふっと触れ得るやり方は幾重にもある。それがここ山荘でやりたいことかもしれない。

■今野裕一



## /// YASO SKULL EXHIBITION

# 夜想・髑髏展

髑髏は死そのものの象徴ですが、また、魂を残像させて、生と死の間を彷徨っている存在でもあります。髑髏は、これまでも作家たちによってその貌をいろいろに表現されてきました。

「生きてきたようにしか死を迎えることはできない」と、よく言われます。が、明けぬ世紀末の昏さに覆われて思うのは、死ぬようにしか生きられない、生の中に死の棺、死の器がある、ということです。私たちは生きた身体の中に観念の髑髏を抱えているのです。

夜想は、髑髏をテーマに作品を依頼することで、この明けぬ世紀末の生と死に向き合う表現を目の当たりにすることができるのではないかと考えました。

## 山本直彰「The Long Goodbye」

どうしてこんな事になったのかは、分からないが、次々に崩れ変化してゆくものがある。例えば小説の読み方。絵画の線についての理解。

展覧会を複数回、行なうと特に顕著に長い間保持していたものが壊れ何かが生まれる。

カフカや髑髏は、ものの見方を変えてくれる。こちらにそれを誘ってくる。

駄目男をデッサンしたい。良いけどそれなら死に絵にして。そうして山本直彰のロンググッドバイは出来上がった。

僕は前日の徹夜でいつの間にか、モデルをしながら首をガクッと落として寝ていた。

アトリエに行くたびに絵は変わって行った。最終を目指して進んで行くと言うより迷走している感じ。カフカ「城」？描かれた肖像はいつか黒く潰され、そして、首が飛び、またそして髑髏になる。ピエタ像に嵌められ、箔が仕込まれ…

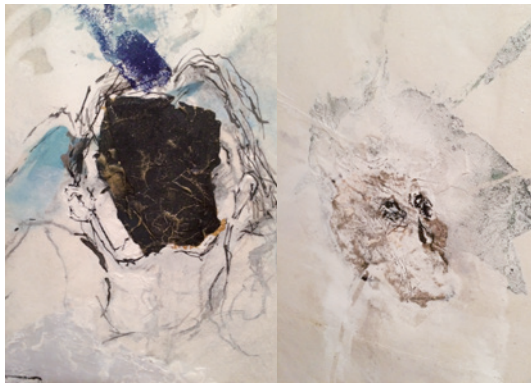
まだ描くの？ もうちょっと。じゃないでしょ。

絵は直彰の思考のままに、日々の感覚のままに揺らいでいく。いつまでもどこまでも。足していくのではなく足しながら消去したりする。だから放っておくと、真っ白い絵がとどけられることもある。

山本直彰の絵は時間と事柄と思考の軌跡だと分った。絵を体験してそれを知った。

髑髏展が僕にくれた変化の一つ。

■今野裕一



山本直彰「The Long Goodbye」部分　*photo: Yuichi Konno*

**夜想・髑髏展** 東京・浅草橋 パラボリカ・ビス
2016年4月1日[金]〜5月8日[日]

**夜想・髑髏展** 京都・山科 春秋山荘
2016年5月13日[金]〜6月6日[月]

[Artist]
相場るい児／金子國義／高村総二郎(京都展のみ)
建石修志／トレヴァー・ブラウン
中川多理／野波浩／フジイフランソワ
丸岡和吾／守亜／山本タカト
山本直彰

## /// Q

# 本函を編集する

「函を使った実験的な遊びをしてみたい」。赤羽卓美の発案で、春秋山荘という古民家をひとつの茶室、ひとつの函と見立てて、茶室に花を活けるように本を活けることにした。場はそこに集まる人の心身がつくるものだから、本はそれぞれに持ち寄ってもらおう。膨張するきれいごとと不寛容の息苦しさから、ここは解放されてありたいから、ヤバくてカッコいい本または何かを。「茶」「幻想」「地場」をテーマに、各自の連想を広げて。

松岡正剛が校長をつとめるイシス編集学校では、「お題」を編集の着火材にする。そのインタースコアの作法を仰いで、これを参加者へのお題とした。

| | | |
|---|---|---|
| 東京 | 大石順子 | 外尾悦郎『ガウディの伝言』光文社新書／2006 |
| | 佐藤晃子 | |
| | 信濃潔 | 「シン・ゴジラ」第３形態フィギュア／2016 |
| | 信濃東河 | 森見登美彦『夜は短し歩けよ乙女』角川文庫／2008 |
| | 高橋紗絵子 | 岡崎京子『戦場のガールズ・ライフ』平凡社／2015 |
| | 竹内裕明 | 「間 20年後の帰還展」図録 東京藝術大学 大学美術館／2000 |
| | 三村千絵 | |
| | 宮坂千穂 | 小林一三『新茶道』講談社／1986 |
| 滋賀 | 藤木不二人 | 飛浩隆「夜と泥の」早川文庫『象られた力』所収／2004 |
| 京都 | 蔭山陽太 | キューバ産葉巻「モンテクリスト'A'（アー）」 |
| | 嘉村賢州 | ハリソン・オーエン『オープン・スペース・テクノロジー〜5人から1000人が輪になって考えるファシリテーション』ヒューマンバリュー／2007 |
| | 篠原幸子 | 神坂智子『シルクロードシリーズ 永遠を見る娘』白泉社／1990 |
| | 柴橋美穂 | 中筋純『流転 緑の廃墟』アスペクト／2015 |
| 奈良 | 松井路代 | 金関寿夫『アメリカ・インディアンの口承詩―魔法としての言葉』平凡社ライブラリー／2000 |
| 大阪 | 川野貴志 | 岡倉天心『茶の本 日本の目覚め 東洋の理想』ちくま学芸文庫／2012 |
| | 鹿間朋子 | 隈研吾『オノマトペ 建築』エクスナレッジ／2015 |
| 兵庫 | 堀江純一 | 倉阪鬼一郎『夢の断片、悪夢の破片』同文書院／2000 |
| 広島 | 河野ひろこ | つかこうへい『蒲田行進曲』角川文庫／1982（見知らぬ男性の古い肖像写真入り） |

夜想茶会記 #04
2016年12月01日発行
発行人◆夜想+今野裕一　編　集◆福田容子 菊池しのぶ
デザイン◆ミルキィ・イソベ 安倍晴美
夜想茶会記運営◆福田容子 赤羽卓美 岩橋賢 大音美弥子



## /// PATRIOTICALLY

### 「疏水」がつなぐもの

京都で「疏水」といえば琵琶湖疏水をさす。滋賀・大津の取水口から、四ノ宮、山科、蹴上と山を抜け、岡崎を経て、鴨川で折れて沿って伏見に至る巨大な用水路。『日本之文華』に露伴が「対髑髏」を発表した3か月後、明治23年4月に開通した。山科駅から山荘に上がる道中にある安朱橋はこの疏水にかかる橋だ。その下を、プランクトン豊富な緑がかった琵琶湖の水は京都方面へ運ばれていく。東京・八雲茶寮の和菓子職人 馬場英豪さんが、この日この会のために用意した菓子は「疏水」。京都で修業を積んだ馬場さんが山荘の場所性を踏まえてこれを作ってくれたことは言うに及ばないが、それにしても「対髑髏」を読むことやお題のテーマに「地場」があることを馬場さんが知るはずもなく、望外の符合に高揚した。流れをあらわす縦縞模様はひとつずつ少しずつ様（さま）が変わる。上流から下流へと次第にゆるやかになる流れを移した佇まいも繊細なら、掌に消える雪のような口溶けもまた繊細。けれど一体どれだけの人が気づいただろう。その縞模様の水色が、まさに疏水の水そのものの少しだけ白濁りした浅葱色をしていたことに。

■福田容子

## /// INFORMATION

◆開催中

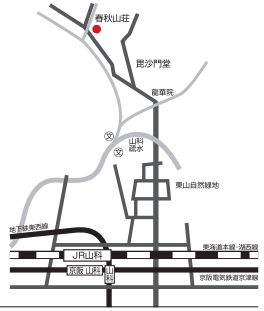
**西條冴子 人形展／劇団イヌカレー ポメロメコ・暗闇 京都巡回展**
**夜想ヴィンテージドール展／遊蓮茶屋 相場るい児&中村美梢展**

2016年11月23日［水祝］〜12月18日［日］
※会期中の金・土・日・祝のみopen　12:00〜18:00　入場料：500円
http://www.yaso-peyotl.com/archives/2016/11/1612syunjusansou.html

◆special event

**「綾辻行人トークイベント『わたしは真悟』とわたし」**
12月10日［土］17:00〜　料金：前売・予約 1500円／当日 2000円 ★要予約

**「季節外れの遊蓮茶会」**
2016年12月18日［日］11:30/13:00/14:00/15:00
会場：京都国立博物館 茶室「堪庵」
料金：前売・予約 2800円 ※京都国立博物館と春秋山荘の入場券付 ★要予約
http://www.yaso-peyotl.com/archives/2016/11/yurenchakai_tanan.html




**京都・山科 春秋山荘**　京都市山科区安朱稲荷山町６　TEL：075-501-1989
各線山科駅徒歩約20分、駐車場有

Parabolica-bis　HP｜http://www.yaso-peyotl.com/　Twitter｜https://twitter.com/yaso_peyotl
FaceBook parabolica-bis｜https://www.facebook.com/YeXiangYasoParabolicaBis
FaceBook Shunjûsansô｜https://www.facebook.com/syunju.sanso/